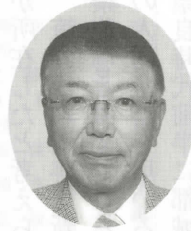


人との出会いで得られた 学びに感謝



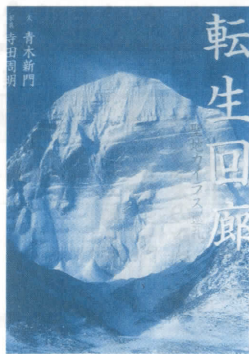
県民カレッジ友の会「雷鳥会」

副会長 本郷 俊作

私の心を一瞬に奪った本。それは表紙がコバルト色の空を背に堂々と聳え立つチベットのカイラス山(6656m)でした。この本「転生回廊」の著者は、青木新門氏。写真は寺田周明氏。チベット仏教の聖地を巡る中で、私たちが想像を越える、厳しい環境に生きる人々と美しすぎる自然の風景、失われつつある仏画や天女の遺跡に出会ったのです。

私がこの本に魅せられたのは、大学時代五百日以上も登山に夢中になっていたからです。肉体的トレーニングだけでなく山に関する多くのことを学びました。この時代の最も大きな成果は、一つのことを徹底して努力すると、五感の他に第六感が働くという体験でした。その上、この本が縁で、寺田周明氏や畔田氏と出会う機会に恵まれ、多くのことを学べるチベットへと誘われたのです。

現地で通訳と運転手を雇いランドクルーザーをチャーターし17日間約三千km、五千m級の峠を幾つも越える旅でした。日頃、美食に慣れた私も、今まで食べたことのない食事やお世辞にも良いと言えない宿、更には寒さ



だけでなく酸素が半分近いために少し動いただけで息が切れるという状態で、想像した以上の厳しさに体も精神も限界でした。反面不思議な快感も感じていました。

企業人を卒業した頃、A氏からこの雷鳥会のご縁をいただきました。生涯学習を考えた時、江戸時代の儒学者佐藤一斎氏の言志四録「少にして学べば……老いにして学べば死して朽ちず」を思い出しました。老いにして学ぶとはいかに。若さは全てを吸収しますが、老いとは逆に肉体や気力も衰え過去に蓄えた知識等も時とともに過ぎ去っていきます。もっと具体的に言えば、今まで築いてきた社会的立場や身近な友人や家族までも無慈悲に奪われてしまうと、言ってもよいかと思えます。しかし私は老いてから判ること、感じることにこそ意味があるのではと思っています。

前段でチベットの体験を書いたのも、「頭で判ること」と「腹に落とすこと」の間は大きいということを言いたかったのです。また、私はM氏との出会いで「自分にとってマイナスの出来事にも感謝できる心と胆力を養うこと」を教えていただきました。論語に「出処進退」を学んでも実践できなければ意味がありません。厳しい指摘ですが、かように私は、多くの人に出会い、多くの人から生きた勉強ができたと感じています。

昨今コロナウイルスで騒がしいですが、この試練にも謙虚な心で学び対処すれば禍い転じて福となるでしょう。深く学べば第六感まで昇華した智慧が降りるからです。